

日本英語表現学会の歩みと現状

中本 恭平

本学会は1982年に「英語表現研究会」として発足した。『ニューズレター英語表現研究』創刊号(1983年)冒頭記事によると、「英語の表現構造と意味(中略)を研究するための(中略)場」として設立された。

たとえば、同じニューズレターの別の記事では、Why don't you sit down? という表現が取り上げられている。この文の「構造」つまり形式は特殊否定疑問文であるが、「意味」的には勧誘または命令として機能する。なぜ発話者はSit down. という命令文形式を取らなかったのか。この2つの表現形式にはどのような意味的な違いがあるのか。こういうことを研究するのが英語表現研究会の狭義の目的であった。1984年に創刊された紀要『英語表現研究』にもこの種の論文は多数発表され、最新号(2010年)にはlet aloneという表現形式が持つ意味的制約に関する論文も掲載されている。

しかし、英語表現研究会は「日本に於ける日本人による、日本人のための研究会」であり、それゆえ「英語教育と(中略)密接な関係があり、「英語教育があつて初めて英語表現ということが意識され得る」ので、「英語教育と直接結びつく」研究会と位置づけられていた(ニューズレター創刊号冒頭記事)。実際、紀要には英語教育に関係する論文が少なからず発表されており、毎年開催される全国大会のシンポジウムでも「大学における英語学習の動機付け—やる気にさせる授業の工

夫」(2009年)、「英語教育におけるCALLの有効な利用法」(2008年)といった英語教育がらみのテーマが取り上げられている。

しかし、英語教育に関する学会は国内外に大小多数存在し、教育に関心のある人はそちらに流れる傾向にある。

その一方で、英米文学の作品論・作家論というべき論文や、英語辞書編纂のノウハウを論じる論文が紀要や全国大会で発表されることもある。

学会は「音声学会」「語用論学会」のように特定の学問分野と直結している場合が多い。しかし、日本英語表現学会はその設立の趣旨からしても、「英語表現学」を極める学会とは位置づけられていない。2007年のシンポジウムのタイトルは「英語表現学の可能性」であったが、それをきっかけとして、学会内で英語表現学を樹立あるいは確立させようという動きがあったわけではない。

今日この学会も経験していることであろうが、本学会でも会員数の減少に歯止めがかからず、全国大会の参加者は少なく、紀要への投稿論文数もここ数年は一桁にとどまっている。

設立の趣旨はもちろん尊重されなければならないが、その一方で、英語の表現形式と意味との接点を求める本学会の狭義の、しかしより本質的な活動が今こそ求められている。ある英語表現をめぐって、英語学、英米文学、英語教育の各分野から学際的な研究が行われることが理想的な姿である。

付記：本記事は、筆者による個人的見解であることをお断りしておく。

(共立女子大学)